

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：15501

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2022

課題番号：20K13048

研究課題名(和文) 日本語方言の同意要求表現における新語形成に関する記述的研究

研究課題名(英文) A Descriptive Study on Neologism Formation in Japanese Dialects' Expressions of Agreement Requests.

研究代表者

黒崎 貴史 (KUROSAKI, Takashi)

山口大学・大学院東アジア研究科・東アジアラボ研究員

研究者番号：60836386

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 400,000円

研究成果の概要(和文)：若年層が用いる同意要求表現「クナイ」「ンジャナイ」「(ツ)ポクナイ」の用法を明らかにした。まず、「クナイ」は、様々な動詞を前接要素とすることができ、東日本より西日本の方が話し手の感情を述べる場面で使われやすい。

次に、これらは話し手と聞き手、および発話場面にいるそれら以外の人物との間で、「情報共有が可能か」「同等量の情報を持っているか」を基準に使い分けがなされることが判明した。また、「ンジャナイ」「(ツ)ポクナイ」「クナイ」の順で、話し手の確信度の強さが現れていることも明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「クナイ」「ンジャナイ」「(ツ)ポクナイ」という表現は、若者間で広く使われ、「相手に自分の判断について同意してもらいたい」ときに使われる。これらの使い方を明らかにし、若者のコミュニケーションのあり方を知ることができた。

例えば、自分の判断に自信がない場合は「ンジャナイ」、最も自信がある場合は「クナイ」を使う。「(ツ)ポクナイ」はその中間に位置する。これらを使い分けて、自分が伝える情報の正確性を相手に知らせていると考えられる。このように、未来の社会を担う若者たちのコミュニケーションや思考に関わる本研究成果は、学術的にも社会的にも意義があるといえよう。

研究成果の概要(英文)：This study elucidates the usage of agreement request expressions 'Kunai,' 'Njanai,' and '(ツ)Pokunai' commonly used by the younger generation. Firstly, 'Kunai' can be prefixed to various verbs and is more frequently used in situations where the speaker's emotions are expressed, particularly in Western Japan compared to Eastern Japan. Secondly, it was revealed that these expressions are selectively used based on the criteria of "whether information sharing is possible" and "whether the individuals involved have an equal amount of information," considering the speaker, the listener, and other individuals present in the discourse context. Furthermore, it became evident that the strength of the speaker's conviction is reflected in the order of 'Njanai' '(ツ)Pokunai' 'Kunai'.

研究分野：社会言語学

キーワード：同意要求表現 否定疑問形式 モダリティ 若者語 方言 社会言語学 語用論

1. 研究開始当初の背景

これまで、同意要求表現についての研究は様々な研究者によって行われてきた。例えば、田野村忠温(1998)「否定疑問文小考」『国語学』、安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』、宮崎和人(2005)『現代日本語の疑問表現 疑いと確認要求』などが挙げられる。これらは、「ンジャナイ」の統語的特徴や用法について論じられている。

また、話し言葉で用いられる以上、音声的な問題も出てくる。同意要求表現と音声との関わりを述べた研究として、田中ゆかり(2010)『首都圏における言語動態の研究』が挙げられる。同意要求で用いられる「ジャナイ」の前接に形容詞(ク形)、動詞(+タク)、形容動詞(+ジャ)、名詞(+ジャ)がきた際、アクセントが平板になり、文末に向けて上昇する「とびはね音調」の存在を指摘している。さらに、方言における同意要求表現と音声の関わりについて述べた研究として、工藤真由美・八亀裕美(2008)『複数の日本語 方言から始める言語学』が挙げられる。この研究では、愛媛県宇和島方言において、質問文と同意を求める文とでは共通語イントネーションとは異なる特徴があると述べている。このように、同意要求表現の用法だけでなく、音声学的な視点からの分析も行われている。

さらに、近年「クナイ」という新しい同意要求表現が若年層を中心に用いられている。これについては、高木千恵(2009)「関西若年層の用いる同意要求の文末形式クナイについて」や平塚雄亮(2009)「動詞肯定形に接続する同意要求表現クナイ(カ)」において扱われ始めた。両研究では、「クナイ」の統語的特徴や用法について論じられている。また、それぞれ関西方言と福岡方言に関連づけて、その成立プロセスについても論じている。このように、新たな同意要求表現が生まれ、それについて語用論および方言学的な視点からの調査や考察が期待される。

しかし、「(ッ)ポクナイ」という同意要求表現も用いられているが、これについて扱った研究は見られない。若年層においては、これらの3つの同意要求表現を用いていると考えられ、それらをどのように使い分けているのかを論じることは、若者語研究だけでなく文法研究に寄与できるものと考えられる。また、地域的な差異に基づいて、これらの用法の違いや成立プロセスを論じること、方言研究の発展に寄与できるだろう。

2. 研究の目的

先述の通り、同意要求表現についての研究は数多く行われている。しかし、「ンジャナイ」については様々な研究の蓄積があるが、「クナイ」「(ッ)ポクナイ」については、まだ十分に明らかにされていない点が多い。本研究は、これらの形式がどのように用いられているか、という学術的問いに基づき、以下3点の問題を解決することを目的として取り組むことにした。

同意要求表現にどのような語が結びつき、どのように用いられているか

音調と同意要求という文法的機能はどう関わっているか

方言によって、同意要求表現にどのような異同が認められるか

まず、クナイについて、先述の通り同意要求表現の統語的特徴については様々論じられているが、「クナイ」「(ッ)ポクナイ」は不十分といえる。「クナイ」については高木(2009)や平塚(2009)で論じられているが、当該地域以外でも用いられているため、より多くの地点での調査が必要である。そこで、福岡・山口・大阪・福井の4地点を対象に、新しい同意要求表現の統語的特徴の分析を試みた。

次に、(ッ)ポクナイについて、同意要求表現の音声的特徴の記述は、文法研究および音声学において重要であると考えられる。しかし、「クナイ」や「(ッ)ポクナイ」という新しい同意要求表現については、不明な点が多い。そこで、インタビュー調査を通して、これらの音声的特徴の記述を試みた。

最後に、ンジャナイについて、平塚雄亮・原田走一郎(2008)「鹿児島県薩摩川内市方言における文末詞センについて」や荒井崇裕(2000)「北信方言「～シナイ」について」など、諸方言における同意要求に関する研究が数多くなされている。しかし、方言の個別的な記述が多く、方言間の対照を扱った研究は少ない。そこで、先述の4地点での調査を通して、地域的差異の記述を試みた。

3. 研究の方法

まず、「クナイ」という同意要求表現が比較的新しく使われ始めている。そのため、この統語的特徴や用法を明らかにすることを優先した。先行研究の成果を踏まえて調査票を作成し、福岡・山口・大阪・福井出身の若年層(18歳~21歳)を対象にアンケート調査を行った。この調査を通して、「クナイ」をどのように使い分け、地域によってどのような用法が見られるかを記述する。

また、「ンジャナイ」「(ッ)ポクナイ」の用法も明らかにする必要がある。そこで、様々な使用場面を想定した調査票を作成し、アンケート調査を行った。これを通して、これらの同意要求表現を若年層がどのように使い分けているのかを記述する。

さらに、音声的な特徴の記述も必要である。そこで、様々な使用場面を想定した調査票を作成し、若年層を対象にインタビュー調査を行った。これにより、それぞれの同意要求表現が持つ音

声的特徴の記述を試みる。

4. 研究成果

前節で述べた研究方法に基づいて得られた成果について述べる。

「クナイ」の特徴について

福岡・山口・大阪・福井の各地域の方言を用いる若年層（18～21歳）計214名を対象に、同意要求表現「クナイ」の用法に関するアンケート調査を行った。先行研究では、状態動詞にしか接続しないという指摘があったが、本研究では結果、「クナイ」の前接要素には、動作動詞や継続動詞など様々な動詞と接続することが判明した。さらに、テイル形やタ形とも接続できる。こうした特徴が全ての地点で確認できたことから、「クナイ」の文末詞化は全国で進んでいるといえる。

また、「クナイ」の形態として、基本形（クナイ）、クネ形、丁寧形（クナイデスカ）も確認できた。このうち、基本形とクネ形が主に使われ、丁寧形は使われにくいことが判明した。「クナイ」が親しいもの同士で使われやすいことが要因と考えられる。そのため、聞き手が話し手より目上の者であっても親しい間柄であれば、丁寧形は使用されるようである。

さらに、地域的差異として、東に比べ西の地域の方が話し手の感情を示す場面において「クナイ」が用いられにくいことが判明した。この背景には、小林隆・澤村美幸（2014）『ものの言いかた西東』や小林隆（2018）『感性の方言学』などで指摘があるように、感情表現の表出の仕方が東日本方言と西日本方言とで異なることが影響していると考えられる。また、ほとんどの地域で話し手の判断を述べる場面において、客観的な根拠に基づいていなくても「クナイ」が用いられることも判明した。このことから、地域によって用法に違いはあるものの、主観的な話し手の判断を述べることに特化した同意要求表現であるといえる。

「クナイ」「ンジャナイ」「(ッ)ポクナイ」の用法について

若年層の山口方言話者（18～20歳）51名を対象にアンケート調査を行った。話し手の感情と「クナイ」に関わりがあることから、モダリティ的用法のあるタ形接続の用法について調査した。

その結果、「持っている情報量の多さ」「情報共有の有無」「話し手の確信度」によって使い分けが行われていることが判明した。まず、情報量について述べる。「クナイ」は聞き手より話し手の方が情報量を多く持っている場合に使われる。主観的な判断を述べる際に使われるという述べた結果を後押しした形となった。一方、「ンジャナイ」「(ッ)ポクナイ」は話し手と聞き手（この両者を「中心者」と呼ぶ）の情報量が同等の場合に使われる。しかし、情報量の共有の有無によってこの2つは使い分けられる。まず、「ンジャナイ」は中心者だけでなく、発話場面にいる他の人物（これを周縁者と呼ぶ）とも情報共有が可能な場面で用いられる。一方、「(ッ)ポクナイ」は中心者と周縁者との間で情報共有ができない場面で用いられる。このことから、「ンジャナイ」「(ッ)ポクナイ」「クナイ」の順で主観性が強くなるといえよう。

次に、「話し手の確信度」について述べる。探索場面において3つの用法に違いが見られた。まず、「クナイ」は話し手だけが探索物を視認した場合に用いられ、「ンジャナイ」は視認していても用いられる。「(ッ)ポクナイ」も視認していても使用できるが、「ンジャナイ」よりやや容認度は下がる。これらのことから、「ンジャナイ」は話し手が自身の判断にあまり自信がない場合に用いられ、「クナイ」は話し手が確信を持って判断を述べる際に用いられるといえる。そして、「(ッ)ポクナイ」はその中間に位置する。これは、先述の主観性とも関わる問題であろう。つまり、話し手の判断を述べる際、それが客観的な事実に伴っていなくても、話し手自信が信じているかが重要となるのだろう。そのため、話し手が自信をもって判断を述べる際は主観性の強い「クナイ」が用いられ、自信がない判断は主観性の弱い「ンジャナイ」が用いられるのだと考える。これは、「クナイ」「ンジャナイ」「(ッ)ポクナイ」という形式が、これらを使い分けることで、聞き手に話し手の自身の判断に対する態度を明示する一種の標識（marker）だともいえよう。

「クナイ」「ンジャナイ」「(ッ)ポクナイ」の音声的特徴について

とで行った調査結果に基づき、若年層の山口方言話者（18～26歳）16名を対象にインタビュー調査を行い、上記の同意要求表現の音声的特徴を調査した。しかし、この調査の分析はまだ十分には済んでいない。そのため、現段階で判明している点について記述する。

高木（2009）では、「クナイ」一段動詞・サ変動詞・カ変動詞のタ形と接続した場合、同動詞の希望形と同形になる（例「食べたくない？」）ことから、タ形接続の場合は1モーラ目が、希望形の場合は「た」の直前のモーラがアクセント核となる場合があるという指摘があった。しかし、本調査ではどちらの場合においてもとびはね音調で発音している。前後の文脈に応じて両者は判断され、アクセントによる弁別は行われていないのではないかと考える。

また、「ンジャナイ」もとびはね音調で発音する割合が高かった。しかし、調査協力者に話を

聞くと、使用場面によってこれも変化するようである。例えば、「冷蔵庫の中にバナナあるんじゃない？」はとびはね音調となるが、次のような場面では、1 モーラ目にアクセント核がきて、「な」から「い」にかけて上昇するイントネーションとなるようである。

(1) A: コンビニにシャンプー置いてあるかな？

B: あるんじゃない？

しかし、なぜアクセントやイントネーションが変わるのかについては不明である。また、(1)の場面でも人によってはとびはね音調で発音するようであり、個人の発音方法の違いによるところが大きいかもしれない。今後も調査を重ねて、分析を行う必要がある。

以上 ~ の結果から、課題は残ったものの、「クナイ」という新しい同意要求表現の文末詞化が全国的に広がりつつあること、方言によって使用場面に差異があること、「クナイ」「ンジャナイ」「(ッ)ポクナイ」が話し手の認識やコミュニケーションの場面に応じて使い分けていることが明らかとなった。これらは、文法研究や方言研究だけでなく、若年層の日本語母語話者がどのようにコミュニケーションをとるのかといった、コミュニケーション研究にも寄与できる結果となったのではないか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 黒崎貴史, 有元光彦	4. 巻 70
2. 論文標題 西日本方言話者の用いる「クナイ」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 273-282
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒崎貴史, 有元光彦	4. 巻 72
2. 論文標題 山口県若年層の用いる同意要求表現ンジャナイ・(ッ)ボクナイ・クナイについて: 発見 場面における用法を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 山口大学教育学部研究論叢	6. 最初と最後の頁 299-304
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 黒崎貴史	4. 巻 11
2. 論文標題 夕形接続の同意要求表現についてー山口県若年層の用いる「クナイ」「ンジャナイ」「ボクナイ」を中心にー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 筑紫日本語研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 黒崎貴史
2. 発表標題 夕形接続の同意要求表現についてー山口県若年層の用いる「クナイ」「ンジャナイ」「ボクナイ」を中心にー
3. 学会等名 第290回筑紫日本語研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------